古典俳文学大系 9

蕉門名家句集 二

安井小洒 編
石川真弘
木村三四吾 校注

集英社

古典俳文学大系9　蕉門名家句集二

昭和47年7月10日　初版発行
昭和48年1月10日　再版発行

©

編者　安井小洒
校注者　木村三四吾
　　石川真弘
編集　株式会社創美社
　　東京都千代田区神田神保町三ノ一七ノ三都ビル
発行者　陶山巖
印刷所　大日本印刷株式会社
　　大文堂印刷株式会社
発行所　株式会社　集英社
　　東京都千代田区一ツ橋二ノ五ノ一〇
　　電話東京二六五局六一一一番
　　振替東京一五六五三番
　　郵便番号一〇一番

定価三八〇〇円

落丁本・乱丁本は本社にてお取替えいたします

目次

凡例……五
作者小伝……六一九
引用書目……六五三

智月尼……九
知足……一九
千子……二五
遅望……二六
蝶羽……二八
釣壺……三〇
長虹……三三
千里……三五
程已……三六
泥足……三七
荻子……四〇

荻人……四一
桃後……四五
桃先……四七
洞木……五一
桃妖……五一
桃隣……五六
杜国……七〇
杜若……七二
怒誰……七四
怒風……七四
土芳……八〇

配力……一三五
白雪……一三六
破笠……一四三
半残……一四五
非群……一四八
尾頭……一四九
百歳……一五〇
百里……一五〇
風国……一六〇
風睡……一六九
諷竹……一七〇
風麦……一八四
不玉……一八五
芙雀……一八七
史邦……一九四
汝村……二〇六
文鳥……二一一
望翠……二一三
木因……二一四
業言……二一七
北枝……二一八
卜尺……二一八
卜宅……二四九
牧童……二五一
北鯤……二五八
牡年……二五九
凡兆……二六〇
正秀……二六五
昌房……二七八
万里女……二八一
万乎……二八二
万子……二八四
毛紈……二九一
木節……二九三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

木導……二九六
野径……三一
野紅……三四
野水……三四
野童……三八
野坡……三〇
野明……三一
游刀……三三
祐甫……三五
陽和……三六
落梧……三八
嵐青……三九
嵐雪……三七
嵐竹……三五
嵐蘭……三八
利牛……三一
吏全……三三
李東……四三六
里東……四三八
李由……四四〇
涼蒐……四四六
良品……四四四
涼葉……四四五
林紅……四四六
りん女……四九五
浪化……五一五
芦角……五三七
呂丸……五四〇
魯九……五四三
路健……五五一
路青……五五六
露川……五五九
魯町……五六一
路通……五九三

呂風……六〇五
蘆文……六〇九
蘆本……六一三

凡例

一、本書は昭和十一年刊、安井小洒編『蕉門名家句集』上下二巻を翻刻したものである。

二、本書刊行後に新しく発見された資料も多く、従って所収句数等において刪訂増補すべきところも少なくないが、それ等についてはすべて底本のままに従った。

三、翻刻にあたっては、底本の編成に従うのを原則としたが、利用の便宜上、左記の諸点において変改を加えた。

1　底本の地方別分類による作者配列を、作者の五十音順に改めた。

2　俳号の訓み方については、明治書院版『俳諧大辞典』に準拠した。

3　底本下巻末に記された「追加部」を、本文中各該当作者の条末に移した。

4　底本各冊のそれぞれ巻初に収めてある「作者小伝」は、一括して第二巻末にかかげた。作者の伝記について、訂正すべきところも少なくなく、可能の範囲において訂正を加えた。

5　引用書目は、編著者及び出版・成立・書写年次等を明らかにする程度に改め略記した。

6　底本所収の作品に対しては、それぞれ使用の原典に就き、努めて再校訂を行なった。従って訂誤補正を加えたところもある。

7　底本が使用したものよりも良質の原典、例えば写本に対する刊本などの所在する場合、勿論後者に改め従った。

8　いま校訂に使用し得なかった原典については、第二巻末引用書目に＊印を附した。

四、本文の表記は原則として原典どおりとし、誤字（仮名遣いの誤りも含む）・宛字等は一切訂正を加えずそのまま掲げ、その右に（　）を附して正字を示した。

五、異体字・古字・俗字等は大方通行の文字に改めたが、「帋」「貝」「支」「厂」「刄」「艸」その他原に従ったものもある。

六、かた仮名については、意識的に用いたと思われるものの外はすべてひら仮名によって統一した。

七、衍字は（　）で囲み、衍と右注し、欠字は〔　〕に入れて補い、それぞれその旨を記した。

八、本文に、私に濁点・句読点、及び漢字にはひら仮名で振り仮名を施したが、原典に附せられた濁点には（濁ママ）二字続きの場合は（濁二ママ）と右注し、元の振り仮名は∧　∨で囲み、それぞれ区別した。

九、現行の表記上、当然送り仮名が必要と認められる部分については振り仮名を附して補った。

一〇、本文が仮名書きで漢字を宛てたほうが理解しやすい場合は、適宜漢字を右注した。

一一、漢文には適宜部分的に読み下しの振り仮名を施したが、返り点・送り仮名はすべて原典のままである。

一二、なお以上の表記法については、原則として底本例言の方針に準拠しつつ、且つ本大系の一般的な方式により変改を加えたものである。

蕉門名家句集　二

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

智月尼

つぼみなる梅あたゝむる春日哉　乙州母「玉藻集」（孤松）

鶯に昼笑はるゝ帽子かな　「玉藻集」〃

桃見せてなかず尿せず婢子哉（濁ママ）　「玉藻集」〃

独寝や夜わたる男蚊の声侘し　「玉藻集」〃

名月に鴉は声をのまれけり　「玉藻集」〃

知てしらぬ身の程かなし秋の暮　「玉藻集」〃

「たゞありあけの月ぞのこれる」と吟じられしに（玉藻集）

哥がるたにくき人かなほとゝぎす　（阿羅野）

たつ秋に我帷子のちゞみけり　乙州母智月（前後園集）

広庭にゆたかにひらく牡丹哉　（花摘）

妻恋は人やとがめん寺の猫（濁ママ）　〃

指さしてのびする児の月見かな　「句双紙」（江鮭子）

（卯辰集）「路通の行脚を送りて」（玉藻集）

（一字幽蘭集）（玉藻集）「路通にわかるとて」

ト各前書アリ

イ見ゆる（卯辰集）（玉藻集）

見やるさえ旅人さむし石部山　（猿蓑）

ひる迄はさのみいそがず時鳥　「玉藻集」（猿蓑）

孫を愛して（葛の松原）前書ナシ

イ麦から（葛の松原）

麦藁の家してやらん雨蛙　「玉藻集」〃

やまつゝじ海に見よとや夕日影　「かなあふら」「玉藻集」〃

稲の花これを仏の土産哉　〃

芭蕉ノ「幻住庵記」ニ附シタル「凡右日記」ニ出ヅ

ねぢ上戸今日は柳にやらしませ　「己が光」（西の雲）

今朝からは何をしてやら春の暮　〃

夏菊や薬とならん床の上　「葛の松原」「玉藻集」〃

かた見分とて送られしが

「伯母の身まかりしに」トシテ乙州、蘚軒ノ句出デタル次ニアリ

秋風に着て泣人の帽子かな　〃

翁の庵の月にまいりて

去年からはたくまぬけふの月夜哉　〃

鉄鉢をあづかり侍りしが

かゆ煮たる鉢のこ寒し棚の隅　〃

上蔟の押こめられましますをとひ奉りて

初雪のあはれは高き所かや　〃

朝毎やちよつちよと来たる鶏（ミソサイ）　〃

老の寐覚のかぎりなきに

雪やけや夜毎に孫が手をふかせ　「玉藻集」（俳諧勧進牒）

仏の日たれにわかれの雪の肌　「玉藻集」　〃

乙州東行の文に　イや（葛の松原）（玉藻集）

わざとさへ見に行旅を不二の雪　（雑談集）

（葛の松原）「大津の禅尼その子乙州が東武の行を送れるとかや云々」ト脇書アリ

しら雪の若菜こやして消にけり　（卯辰集）

木曽義仲の塚に詣でゝ

雪消てあはれに出し朝日塚　〃

手を上てうたれぬ猫の夫かな　〃

弓は右手真唯中や雪の竹　（色杉原）

ふしなふて夜の明安き蚓哉　〃

三井の鐘聞てほどけや冬の空　（北の山）

なぐられてこぼるゝ罌粟や日のうつり　「玉藻集」（罌粟合）

我ながら童部らしさよ飛蛍　（己が光）

盤子白川へ行脚を聞て

鉢の子に請よ桜はちりぬとも　〃

竹子や境めもしらず二番生　〃

芥子咲て見るや近江の船の足　〃

盆に死ぬ仏の中の仏かな　（己が光）

涼しきや夏田の畔の昼あがり　（一字幽蘭集）

亡夫の七回忌をとぶらふに、我と同じ道なる人々の来りければ　イ「の」ノ字ナシ（玉藻集）

かゞしにもあはれさまけじ尼中間　（濁ママ）（村）〃

初雪の畳ざはりや櫻（シュ）櫚（ロ）箒　「玉藻集」　〃

腰のして若菜つまばやうら屋敷　（祚原）

翁の伊賀へをはす時

散花も心やすしや旅の僧　〃

句空が大津を立侍るとき

鉢の子にうけよ桜はちらずとも　（濁ママ）　〃

乙州がこしぢへくだりける時　（濁ママ）

首途や幸つくる初茄子　〃

何某といひたさふなる案山子哉　〃

汗入に孫をちからや内はだけ　（鶴来酒上）

御火焼のもり物とるな村烏　イ盆物（炭俵）（玉藻集）　（蔦獅子集）

羽黒の呂丸は、いまだ若ふして風雅の友をしたひ、初て洛にのぼり、程なくなき身となりしこそ、尚あはれなれ

国の子はわろさいふらん手向花　（鷹獅子集）

山桜ちるや小川の水車　〃

「翁草」「炭俵」「笈日記」「梅桜」「藁人形」「玉藻集」

「芭蕉の旧菴木曽塚にて史邦に別るゝの二首」

トアル内

宵寐して涼しく歩め朝のうち　〃

路通、西国旅寐も去年今年と立帰り、文来りしを発句して返す

其まゝにあれよ涼しき骨海月　〃

手をつゐて月指のぞく松の間　〃

きり〳〵す鳴やかゞしの袖のうち　〃

雪の夜や朧豆腐のなつかしき　〃

うごく時木の葉散けり井戸の内　〃

雪信が草花珍し冬籠り　〃

流るゝや師走の町の煤の汁　〃

川中にとゞして見たし夏の月　（流川集）

涼風や余所の鉦鼓に南無あみだ　〃

〔注〕右二句（玉藻集）ニ園女ノ句トセルハ誤也

淋しさを我物がほや秋の鳩　「玉藻集」

幽霊に水のませたか鉢たゝき　〃「小文庫」「玉藻集」

眉やあぶな〳〵もむかし家　（猿丸宮集）

珍碩東武の餞別

さびしさを我とおもはん秋の鳰　〃

崎風はすぐれて涼し五位の声　「玉藻集」（炭俵）

ひるがほや雨降たらぬ花の貝　「玉藻集」〃

年よれば声はかるゝぞきり〳〵す　「玉藻集」〃

待春や氷にまじるちりあくた　「玉藻集」〃

なしよせて（玉藻集）イおしよせて鶯一羽としのくれ　「梅桜」〃

七度の花のはじめや早稲の花　「玉藻集」（句兄弟）

立待や痺直さん臼の上（ヘンビ（渇ママ）リ）　「玉藻集」（藤の実）

居待月起て守らん枕挽　「玉藻集」〃

寐待月船も閑に行次第　「玉藻集」〃

鉢扣夜更て道の広さかな　「玉藻集」〃

溜池に蛙生るゝぬるみかな　「玉藻集」〃

手枕や月は布目の蚊屋の中　〃

〔注〕（玉藻集）ニ「月の布目の」トアリテ園女ノ句トセルハ誤也

素牛を宿して

すゝみ出て瓜むく客の国咄し　〃

〔注〕（玉藻集）ニ園女ノ句トセルハ誤也

あさがほの花にみとれて昼寝哉　「後れ馳」（住吉物語）

なき出して米こぼしけりいな雀　（有磯海）

嵐蘭子をいたみて（金毘羅会）前書ナシ

おろ〳〵（濁ママ）とむかへば月の御光かな　「玉藻集」　〃

イとぼ〳〵と（翁草）

たけのこや皮つきこはし甲武者　「玉藻集」　〃

あふ坂やいとゞせき合せみのこゑ　〃

「翁草」「とてしも」「玉藻集」

白牡丹子は幾たりも持けれど（濁ママ）　「玉藻集」（笈日記）

「芭蕉翁百ヶ日追悔」トアル内

粟津野に通ひかゝりて百ヶ日　（後の旅）

としのうちに春立ければ

イ年内立春（韻塞）（玉藻集）

冬のはるこゝろの外や梅の花　〃

「三七日開二翁自画之像乙州宅一」ト前書シテ諸家ノ句ヲ出セル中ニアルモノ

像の絵に物いひかくる寒さ哉　「玉藻集」（芭蕉翁行状記）

「四七日翁頭陀笠杖寄二進義仲寺一」各題三三物一有レ句」ト前書シテ諸家ノ句ヲ出セル中ニアルモノ

冬の日や老もなかばのかくれがさ　「玉藻集」　〃

「六七日　路通亭一座興行」ノ内

あとの月おもへば氷るたゝき鉦　「玉藻集」　〃

「尽七日反古さらへ」ト前書シテ諸家ノ句ヲ出セル中ニアルモノ

噛しだく反古のばさむ生火桶（カミ　イケ）　「玉藻集」（芭蕉翁行状記）

別ニ諸家ノ追悼句ヲ出セル中ニアルモノ

いふまいとおもへど雪吹く死出の旅（濁ママ）　「玉藻集」　〃

水仙の花の高さの日かげ哉　「玉藻集」（小文庫）

さかもりや一雫にて年わすれ　〃

イとしの暮（玉藻集）

琴引て老をがませよ夕すゞみ　「玉藻集」　〃

我形の哀に見ゆる枯野哉　「玉藻集」（韻塞）

わらすべにゆはれ次第や芹薺　（初蟬）

花ちりてあたまにかゝる柳かな　〃

花さくや五尺にたらぬ木なれども　〃

梅桜九十九浦や鳰のうみ　〃

ほの〳〵と炭もにほふや春火燵　〃

夏痩の貞も肥たる月見かな　〃

年の気もどこやら寒きこたつ哉　〃

むかしこそ今はかぞへずとしのくれ　「浮世の北」　〃

逢坂や花の梢のくるま路　「泊船集」「玉藻集」（浮世の北）

笠きせて似せても見たし枯芭蕉　（翁草）

はや〳〵と菰かぶりても諂ぞめ　〃

イ苔（玉藻集）

雪汁のぬくみ急よ芝の花　「続別座敷」　〃

寒食や海山を経て哀なり　（翁草）

有るとなきと一本指けり芥子の花（イないと（茶の草子）（旅袋）「続猿蓑」「誹諧師手鑑後集」）〃

移り替る蛍や勢田の橋懸り　〃

降雪に犬の欠や八ッの比　〃

いつの世の茶にをかされて鉢たゝき　〃

孫どもに引起されて歳の暮　〃

此墓の三とせは夢にしぐれかな　（喪の名残）

咲花の見せの盛やいせわかめ　〃

折〳〵や火をさしくべて夕涼み　「宰陀稿本」〃

ものよみや花ぞひらくる（イに（後れ馳））一葉づゝ　（菊の香）

とその酒九度の上や梅の花　（梅桜）

京なるひとのもとへ申つかはしける

うぐひすやけふ一こゑのふみづかひ　（鳥の道）

玄梅子、撰集のよし聞て

夜はながしならの咄しや南円堂　〃

湖上

はるの海ふねもその日の機嫌かい　〃

翁の忌日木曽塚にまふで

戸を明て咲花見せん仏達　〃

目の玉を取て出けり蟬の空（カラ）「淡路島」（染川集）

（考）目の玉は取て出けり蟬の声　臥高（初蟬）

目の玉は取て出（発）臭蟬のから　臥高（菊の香）

大小を嬢（嫁カ）に問れよ花の春　（元禄戊寅歳旦牒）

歯朶（し だ）うりと一度に鴨の羽音哉　〃

春風に塵（ちり）もほどくる氷かな　（続有磯海）

八月十五日（菊の道）前書ナシ

此心常にあらばやけふの月　〃

鬼づらに笠ぬがしけり萩の花　「柴橋」〃

老床ねざめがちなりければ

春の夜の後夜（ご や）もわれより若き哉　「網代笠」〃

真愚上人にわかるゝ

さつぱりところもたゝかれ更衣（ころもがへ）　「玉藻集」（泊船集）

（砂川）「三井の観音堂に月見して」ト前書アリ

明月や志賀の磯田の榎の実いろ　〃

イ浜田（砂川）イ榎いろ（玉藻集）

鶯に手もと休めむながしもと　（続猿蓑）

ふたつあらばいさかひやせむけふの月　「玉藻集」〃

木がらしや色にも見へず散もせず　「玉藻集」〃

神の田や升（ます）つき見たる縄手（なはて）苅（がり）　（淡路島）

麦は（む）らの焼音高き寐覚哉　（網代笠）

イ頻づゝみ（射水川）

（濁ママ）ずぶぬれやさ月男の顋（頬）かぶり　（網代笠）

四国の人と我栖をとはれ別るゝとて

夏の月をくそこあらじ四面の海　〃

是も又ちから仕事や柿団扇　〃

老の身のあふは珍し夏木立　〃

イ日のかげを（艸之道）月日をもうくるばかりの枯野かな　「花見車」（けふの昔）

年よればなを物陰や冬ざしき　〃　「旅袋」

七夕や稲の初穂の御座れ餅　〃

参宮人にとはれて

志木の葉につゝむ伊勢わかめ　（誹諧曽我）

舎羅（濁ママ）があたま剃けるに

帷子は着ルともふどし（濁ママ）わするゝな　乙州

同じく申遣しける

我が形に成とは聞ど瓜茄子　〃

世のうさや臍に成てよばひ星　（小弓誹諧集）

春風の月に跡さす衾かな　（旅代）

ふれ〳〵と枯木の谷の若みどり　〃

梅咲て藪に目のあり壁に耳　（蓑笠）

枯野にも若い顔して此薄　〃

餅つくに鶯も来よ梅ならし　（青莚）

さす花にふるとかゝるな今朝の霜　（雪の葉）

鶯の意地のわろきも直りけり　「文蓬萊」

うら風に松はひとりのさむさかな　（艸之道）

正秀東武餞別

はる駒にしめて乗よき手綱哉　（金毘羅会）

〃

〈イナ〈ヘキ〉〉筆に跡付門のすゞみかな　〃

とつぱかはしても一期ぞ望帝　「其木枯」（草庵集）

我年のよるとはしらずはな盛　「初便」「玉藻集」（続別座敷）

木〳〵の根の独くつろぐ霜こぼれ　「玉藻集」

うぐひすよほゝうばかりをくりかへせ　〃（砂つばめ）

北風にねぢ合菊のつぼみかな　〃

〈ミガキ〉磨立待月うつる茶釜かな　〃

鶯の声に旦のあそびかな　（されゞ〳〵）

息災な顔を見せけり鳰の亀　「干網集」　〃

此句（干網集）ニ左ノ如ク出ヅ

志賀津の乙州を尋侍れば、折ふし東武へおもむきたるとてあはず。知月尼に恩顔を謝す。とし比ゆかしかりつるに、けふしもまみゆることのよろこばしさよとて

そくさいな顔を見せけり鳰の亀　知月

ときて涼しきもゝ引の跡　百花

因ニ百花ハ野村氏、金沢ノ書林也

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com